

年間第三十主日

2013.10.27

ルカ 18・9-14

先週の主日の福音に続いて今日の福音にも、祈りについて語られたイエスさまのたとえ話が伝えられています。先週の主日のミサでは、気を落とさずに絶えず祈ることの大切さを教える、やもめと裁判官のたとえ話を聴きました。それに続いて今日の福音には、祈るために神殿に上ったファリサイ派の人と徴税人のたとえ話が伝えられています。けれども、先週の福音もそうでしたが、今日の福音においてもイエスさまは単に祈りについて教えておられるだけではありません。

今日のイエスさまのおことばは驚くばかりです。イエスさまは、どのような人の祈りが神に受け入れられて神のみ前で義とされ、どのような人の祈りがそのような結果にはならないかをはっきりと語っておられます。ここには、すでに最後の審判者としてのイエスさまのおことばが響いているようにさえ思えます。

イエスさまがこのお話をなさったとき、弟子たちはどのような思いでこのようなことを語られるイエスさまのお側にいたのでしょうか。私たちがその場にいたなら、イエスさまのこのお話を聴いているファリサイ派の人々が、このようなことを語られるイエスさまに対してどのような思いを抱くか心配にならないのでしょうか。そこまで言わなくても弟子たちも固唾を呑む思いでイエスさまが語られることを聞いていたことでしょうか。しかし、ここに福音書に伝えられているイエスさまの福音の真髓が示されているのです。たとえ話の中のファリサイ派のような人ではなく、徴税人のような人の祈りを神は受け入れてくださり、そのような人を義としてくださるとイエスさまは宣言されています。イエスさまがここで語られていることは、福音書に語られているイエスさまが一貫して主張されている中心的な基準です。徴税人のレビを弟子に加え、その仲間たちと食事の席に着いたイエスさまと弟子たちを見て、ファリサイ派の律法学者たちが「なぜ、あなたたちは徴税人や罪人などと一緒に食べたり飲んだりするのか」と苦情を述べたとき、「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」とイエスさまはそれを聞いた人々が目を剥くようなことを宣言されています。ルカ福音書 5 章 27 節からのこ

のエピソードに続いて、33節からの箇所には、「新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れねばならない」というおことばが響いています。今日のたとえ話においても、ファリサイ派の人のように律法のおきてを完全に守り、週に二度も断食し、定められた以上のささげものをするというような信心深さによって、人は神さまの前で義とされるのではない。むしろ、悔い改めて神の憐れみを乞い求めることこそが神の御心に適うささげものとなるのだとイエスさまは主張されています。イエスさまのこのような教えには、発酵途中の新しい福音のぶどう酒が泡立っています。そのようなイエスさまのおことばを受け入れるために、わたしたちも自分自身を振り返って、新しい皮袋を用意しなければなりません。

今日もわたしたちはここに集って、イエスさまが招いてくださった食卓の祭壇を囲んで祈りをささげています。そのようなわたしたちに、今日の福音のおことばはどれほどの衝撃を与えているのでしょうか。思わず首をすくめ、お尻がもぞもぞと感じないとしたら、わたしたちはこれほどのイエスさまのおことば耳にしても、心動かされることのない者たちと言われても仕方ないかもしれません。

イエスさまはわたしたちの祈りをかき乱し、祈りとはどのようなことであるかに気づかせようとして、このようなきびしいおことばを発しておられるのです。

祈りが祈りとなるのは、それが神に受け入れられるときときです。ささげものが、ささげものとなるのは、それが神に受け入れられるときであるのと同じです。神はアベルのささげものを受け入れられましたが、カインのささげものはそうではありませんでした。受け入れてくださる神がおられてこそ、ささげものはささげものとなり、祈りは祈りとなるのです。そして、わたしたちがささげる祈りが神に受け入れられるものであるかどうかは、神がお決めになることであり、わたしたちにできることは、ひたすらに、わたしたちの祈りが神に受け入れられることを願うことだけです。祈りとはこのようなことであると本当に分かる時、わたしたちは祈りにおいて神と出会うことができます。神はわたしたちの性根を見きわめられ、それに従って、わたしたちの祈りを受け入れてくださるのです。そのような神のみ前に、真実、膝をかがめ、イエスさまが語られた徴税人のように、胸を打ちつつ、ひたすら神の憐れみを乞うとき、わたしたちは、はじめて、神の御前に謙虚な者となることができます。神の御前に謙虚であるとは、神に祈る自分が何者であるかを知っており、自分が祈りを

ささげる神が、どのようなお方であるかを知っているということです。

「謙虚な人の祈りは、雲を突き抜けて行き、それが主に届くまで、彼は慰めを得ない。彼は祈り続ける。いと高き方が彼を訪れ、正しい人々のために裁きをなし、正義を行われるときまで。」

今日の第一朗読で聴いたシラ書のこのことばは私たちにとって新鮮です。それは、あらゆる虚飾を脱ぎ捨てて、謙虚に神に祈る人の祈りのスケールの大きさを感じさせます。それは、私たちの日常の願い事を祈る祈りをはるかに越えて、この世の理不尽な苦しみの中に身を置きつつも、それによって苦しむ全ての人と一体となって、いと高き方の訪れるとき、神の裁きるときを忍耐強く待ち望む祈りです。イエスさまの十字架上の最後の「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」（ルカ23・45）との祈りは、そのような祈りでした。そして、そのイエスさまの記念としてのこのミサの中で、わたしたちが唱える全ての祈りは、そのイエスさまと結ばれた、「わたしたちの主イエス・キリストによって」父なる神にささげられる祈りとなるのです。全てを神に御手ゆだねることができる者のみが、真に祈ることができるのです。

イエスさまのお話の中の徴税人は神殿での祈りのあと、どのような気持ちになって家路についたのでしょうか。イエスさまは彼の祈りが聞き入れられ、神によって義とされたと言われていますが、彼自身は、そのことさえも神の御手にゆだねて家路についたのかもしれませんが。迎えた次の朝も、徴税人は徴税人としての生活を生きざるをえなかったことでしょう。その彼の心の中に神殿で祈ったあの祈りが余韻となって響き続けていたとしたら、そのことが、徴税人として生きざるを得ない彼の心を苦しめたにちがいありません。そのような心の葛藤の中で迎える次の安息日にも、この徴税人は神殿に上って行ったと信じたいと思います。そのような彼の上に、「義とされて家に帰ったのはこの人だ」と、わたしたちが信じるイエスさまは宣言しておられるのです。このイエスさまのおことばがああ徴税人の心にも、そして、ここに集うわたしたちの心にも染み渡る恵みを祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高